

～2012年の課題と対応～

住田明子（全国農業協同組合連合会 肥料農薬部）

2008年の本シンポジウムにおいて「農薬使用現場における課題」として、農薬取締法や食品衛生法などの法改正、温暖化等の気候変化、生産者の高齢化、食生活の多様化といった農業を取り巻く環境変化が要因となり、さまざまな課題があがっていることを話した。

その後4年が経過し新たな課題も見られている。現在の課題をまとめてみた。

### 1. ポジティブリスト制度の導入に伴う課題

制度導入以降に公表された基準値超過事例とその要因を見ると、要因として最も多いのが適用外使用・使用基準違反で、次いでドリフト、散布機の洗浄不足、となっている。

当初、課題とされていたドリフトによる一律基準値超過は、制度導入直後は多くなかったものの、ここ1, 2年報告が見られるようになってきた。特に、果樹園での近接散布や水稻本田防除剤のドリフト等の報告があり、再度、使用者に対する徹底が必要と考えられる。

また、万が一ドリフトしても問題とならないように、作物の適用範囲の広い薬剤が選択される傾向にあり、ネオニコチノイド系殺虫剤や、ストロビルリン（QoI）系殺菌剤が多用される実態がある。同系統の薬剤が連用されるため、特定の害虫の増加や、抵抗性害虫・耐性菌の発生、といった課題が懸念されている。今後は、剤の選定による残留回避ではなく、ドリフト防止対策を徹底することが重要であり、そのための新たな技術開発も期待される場所である。

### 2. 農薬の適正使用指導における課題

適用外使用や使用基準違反による基準値超過は、人為的なミス（当該作物に使用できると思いついでいた、希釈倍数を間違えた、等）によるものが多い。農薬取締法改正後、ラベルを見て使用することは徹底されてきたはずであるが、周知だけではなく、なぜ間違ったのか、間違えないためには何が出来るのか、を考えた対応が必要である。

---

#### The present situation and problems in agrochemical use

Akiko SUMIDA (ZEN-NOH, Fertilizers and Pesticide DEPT.)

Farmers are faced with various problems in use of agrochemicals. For the solutions for the problems, they expect to develop methods to reduce drift, and cleaning methods for spraying machines to prevent agrochemical residue from remaining in crops unintentionally. New agrochemicals for resistant pests and new application methods to reduce cost and labor are also demanded.

また、近年直売所での作物販売が盛んであり、店舗数・売り上げともに増加傾向にある。消費者は新鮮さ、安さとともに、安全性を求めて直売所を利用している。直売所への出荷者は農業経験や年齢等が幅広いため、より一層の適正使用に関する指導が必要である。また、少量多品目生産に適した適用作物の多い農薬、小型規格、施用の容易な包装形態などが求められている。

### 3. 病虫害防除における課題

タバココナジラミによるトマト黄化葉巻病やウリ類退緑黄化症、飛来性ウンカによるイネ南方黒すじ萎縮病など、新たな媒介ウイルス病が問題となっている。また、ブドウベト病やスリップス・アブラムシなどで新たな抵抗性害虫、耐性菌の発達も見られている。

一方で、水稻栽培では特別栽培の増加により農薬の使用方法が変化し、その結果、病虫害草の発生にも変化が見られる。例えば、温湯消毒や微生物種子消毒剤が普及しているが、使用方法が適切ではなかったためにばか苗病の多発生となった、長期残効型箱処理剤の普及で本田防除が減少したため、稲こうじ病などこれまで問題とならなかった害虫や病害が顕在化した、などがある。SU抵抗性雑草はオモダカなどの多年性雑草にも見られるようになったほか、圃場管理が不十分なために畦畔雑草であるイボクサ、アシカキの本田侵入など特殊雑草の課題も増えている。

そこで、新たな農薬の開発が期待されるが、現在登録に向けて試験中の薬剤は残念ながら既存剤と同系統の薬剤が多い。新規農薬の開発に要する時間とコストは以前よりも多く必要となっており、今後の新規剤の開発は困難な状況が予想される。一方で、世界的に使用量が減少したため販売中止となる剤も多い。

今後は、既存剤の効果を維持し、長く使用するために、抵抗性害虫、耐性菌を発生させないための工夫が必要であり、剤の特徴・系統を知った上でのローテーション防除やIPMの現場への定着が望まれる。また、既存成分の新たな施用法による防除も期待される。

### 4. 省力・低コスト化にむけた課題

生産者の高齢化が進む一方、法人化・大型化も進むと見られている。こうした大規模生産者は防除コストに対する意識が高く、剤そのもののコストだけでなく、人件費が削減できる省力技術に関心が高い。また、水稻の直播栽培や麦・大豆作などでは、栽培体系そのものが検討段階にあり、省力的な防除技術を取り入れた体系の検討と完成が望まれる。

課題解決のための新しい技術や薬剤の開発が期待されるが、生産者に普及させるためのステップも重要である。多様化する生産者への情報提供と技術普及をいかに行うか、についても課題となっており、行政・業界とともに取り組みたいと考えている。